

② 学びの理論的基礎

PBL教育を導入すれば、学生の自己内対話が促進され、主体的学習力が形成されるわけではない。例えば、PBL教育の特性のひとつに「グループ活動の活用」があげられている。この「グループ活動」をどのような学習理論で解釈するかによって、授業の内容も展開も成果も異なってくるように思われる。日本で普及している3種類のグループ学習とその理論的基礎には、次のものがある。第1に班学習と呼ばれる「集団学習」= 集団主義 (collectivism = 集産主義) の伝統、第2に協同学習 (cooperative learning) による「話し合い」学習 (Johnson & Johnson, Slavin), そして、第3に発

達最近接領域の理論 (Vygotsky) と民主主義と対話的コミュニケーションの理論 (Dewey) を基礎としている協同的学び (collaborative learning) である。

本授業は第3の学びの理論を基礎としている (図1)。それは前述の自由記述にも表れている通り、班長を中心とした役割分担制の活動が進められているわけではなく、ましてや話し合いによって意見を一つにまとめようとする活動が展開されているわけでもない。授業内ではペアやグループ活動を多用しているにもかかわらず、学びを個人的営みとして認識されていることが特徴的である。ヴィゴツキーは「発達の最近接領域は、自力で問題解決できる現実の発達レベルと、大人の指導や有能な仲間との協同のもとで問題解決できる可能性の発達レベルとの間の距離である」と述べている。これは、課題水準が教師や仲間の援助によって到達できる高いレベルに設定されているため、他者と協同せざるを得ない状況がつくられることとなり、他者に媒介された活動の内化が中心となってくる。そのため、学びのベクトルが自己へと向き、他者の

表1 「先生に続けて欲しいと思う事」の自由記述分類<自己内対話>

- <自己内対話>
- 毎週の課題を出すこと。
 - 毎回のレポートと課題を続けてほしい。
 - 毎回課題を出すことは大変だけれど、授業が途中でとぎれることなく続いていたのでよかった。
 - とても大変だったが、授業外でも本を読み調べたり、インターネットから情報を得たりと、さまざまな知識が身についた。
 - 毎回のレポート(授業デザイン)と振り返りは本当に自分のためになった。
 - 課題は大変であったが、確実に自分を成長させることができるものだと思うので続けてほしいです。
 - 毎回のレポートはとても大変だったが本などを読み、自分の知識を深めることができた。
 - 毎回の授業での課題はとても自分のためになったし、しっかり振り返れてよかった。今までにない観点から考えてより深く考えることができた。
 - 毎回のレポートによって自ら調べ学習することが身につく、深く学習することができた。
 - 毎回の課題は少しきつかったが、あれがないと、学びの深さが全く違うと思うので続けてもらいたい学習に対する意欲が大きく変わった。
 - 学びの履歴。毎回の授業内容を確実に振り返ることが出来る。前期が終わり、また書いたものを見て学びを見つめ直すことが出来て良い。
 - 授業後の振り返り課題では、単に反省をするのではなく、さらに調べ直すことでより知識を確かにし自分の力にすることができたのですごくよかった。

表2 「先生に続けて欲しいと思う事」の自由記述分類<主体的学習>

- <主体的学習>
- 予習と復習。学習の仕方のヒントを出すこと。
 - 何も知識がないなかから答えを完全に出すのではなく、ヒントをあたえていただくことで、また次調べたりして学ぼう、身につけようという気が出てきたのでそういったヒントで続けていただきたい。
 - 生徒に答えを写すのではなく、ヒントを与えることによって、自分で調べようという気持ち自然とわいてきた。モチベーションの向上につながるので、これからも続けてほしい。
 - 答えは一切言わずに学生自身で考えさせる機会を与えることは大変重要なことであると思うので、ぜひ続けてほしいです。
 - 簡単に答えを言わずに、常に個人に調べさせること。考えること、調べるという学びをさせることで他の授業においても用いることのできる学習方法を身につけることができる。
 - わたしたちが話し合う内容をうまくまとめ、次の課題へと話をつなげるという展開で、次回への意欲をわかせて、授業を終えることかできた。
 - 専門用語をとことん出さず出すこと。
 - 教材、素材に対する徹底した研究や学びの理論に対する教育。
 - 毎回興味深い講義で一番時間がすぎるのが早い授業でした。

アイデアをヒントにするというscaffolding(足場づくり)が主体的学習につながっているものと考えられる。

PBL教育の推進にあたって注意しなければならない点は、安易な形式や方法論の普及ではなく、なぜその方法を用いるのかという確かな理論的基盤を持つことであると確認できた。

(岡野 昇)

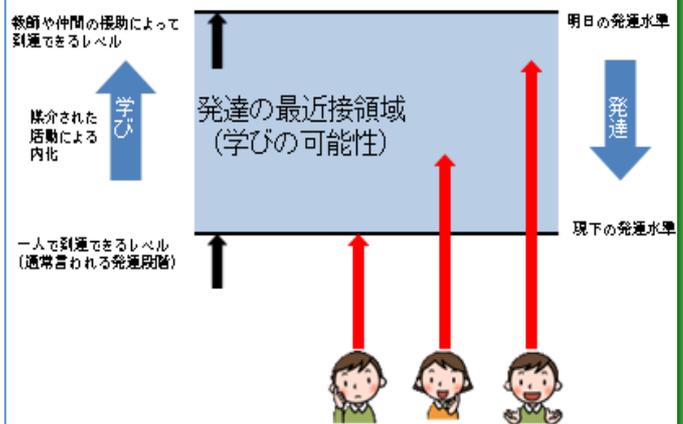


図1 本実践の理論的基礎